

## <書評>

乙川優三郎

『ロゴスの市』

(徳間書店 2015, 262 ページ)

ISBN-10: 4198640424

ISBN-13: 978-4198640422



評者 鶴田知佳子 (東京外国語大学)

通訳者・翻訳者の仕事とはどういうものか。苦勞する点、喜びを感じる点はどういうものか。通訳と翻訳の仕事の本質とは何か。通訳者や翻訳者の仕事の中でどのような日々の葛藤があり、キャリアを通じてどのように成長をしていくのか。通訳指導をしていると学生からよく受ける質問である。

この問いに答えるのに、通訳者や翻訳者が自らの体験談を中心に語った仕事についての本を参考にすることもある。このような個人的な体験談の本は、どうキャリアを得たのか示唆を得られる点も多々あるが、キャリアを築く上での苦心や成長の過程の考察というよりはエピソードが中心である。では、通訳者が主人公である映画や小説はどうだろうか。オードリー・ヘップバーンが通訳者に扮した『シャレード』、ニコール・キッドマン主演の映画と小説の両方がある『ザ・インタープリター』などがある。男女の主人公がともに中国語とフランス語の同時通訳者という設定で、*The Interpreter* という台湾で制作されている英語字幕つき中国語ドラマもある。通訳をしている場面や、通訳教育大学院の様子なども登場するが、現場の通訳者、翻訳者の様子を知るものからみるとかなり脚色がされエンタテインメント色が前面に出ている。それらと比べると、乙川優三郎著の『ロゴスの市』は、主人公の男女が、翻訳家と同時通訳者になるまでの二人の主人公のキャリア形成の様子も含めて、丹念に描写されている。「作家と違うところで複雑な言葉と闘っている人たちを題材にすることで、日本語の特性や、自分の文章が見えてくるかもしれない」と、乙川氏は毎日新聞の書評のインタビュー(ウェブサイト末尾に掲載)の中で語る。

この作者のコメントにも表われているように、通訳翻訳の仕事とは言葉との闘いである。自分の通訳あるいは翻訳が果たして、もとの話者、作家の「言いたいことを伝えているか？」自分自身の考えの表現であっても、自分の言いたいことを言葉にするのは難しい。通訳翻訳は自分ではない他の人が伝えたい意図を汲みとり元の言語とは

---

TSURUTA Chikako, "Book Review: Rogosu no Ichi (Into the Logos)," *Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. Pages 169-172. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

違う言語で伝える、という言葉との格闘だ。この作品は言葉との格闘である2つの職業を追求する主人公の姿を描き出すことで、上記の学生からの問いの答えをいみじくも提供してくれる。

『ロゴスの市』では、二人の主人公の同時通訳者、翻訳者の仕事の葛藤が、学生時代に同じ英語を学ぶ学生として出会ってから数十年の展開として描写される。舞台は東京、三鷹にある大学から始まる。女性の主人公は同時通訳者としてその場におけるコミュニケーションを成立させるための仕事に生きがいを見出している。大学を卒業後、アメリカ西海岸にある有名通訳翻訳大学院への留学を経て、通訳エージェントSの専属通訳者として頭角を現していく。それに対して、男性主人公は、翻訳といういわば時間と空間を超えて、作家の思いをまだ見ぬ読者に伝える仕事に従事する。いずれも通訳・翻訳職が実態に即して丁寧に描写されている。

ここで描かれているのは、最後に劇的な終わり方をする女性主人公の物語もさることながら、表現をすることに命を削る「通訳者」「翻訳者」の職業における言葉の格闘の話だ。いかにして通訳者は、また翻訳者は、他者の言葉を違う言語を解する読者と聴衆に届けていくことが出来るのか。その過程の描写がこの小説の最も優れた部分であるが、表現者としての目的を遂げるため、2人の主人公がそれぞれ創意工夫をして苦しみながらも成長していく過程に読者としては最も惹きつけられる。そこに浮かび上がるのは、通訳者・翻訳家も表現者として日常的に仕事の上で苦悩し人間的にも成長する姿である。男性の主人公である翻訳家が、自分が選んだ翻訳の仕事と女性が選んだ同時通訳の仕事を対比して語るシーンに、そのことがよく現れている。

「言葉という音を耳から入れて即座に口から訳し出す同時通訳に対し、文字言語を目から入れてペン先に訳し出す翻訳は再考のできる仕事で、弘之の慎重な性分に合っていた。同じ人間のまったく異なる言葉を母国語に替えながら、原作者の思考回路を巡り、作中人物の精神構造を読み、時代と風土を捉え、文学的な表現にふさわしい日本語を見つける。」(本書の4ページからの引用)。

時間と空間を超えたところに存在していた人たちの思いを的確に理解して、どのように表現していくのかという作業に神経を集中し、努力を注ぎこむ孤独な作業とピタリのことばが見つかったときの喜びに、通訳者として筆者は共感する。

次に本書の164ページからの男性主人公と作家との対話では、作家がどのような思いで世界の中に生きる人たちの声を伝えているのか、他の人の思いをおしはかり解釈して伝えるという意味では作家も「通訳」であるということが語られている。

「世界の現実は無数の人生のシャッフルで造られているような気がします、たとえ小さな島に生まれても大きな現実の渦に巻き込まれずにはられません、文学とはそ

ういう個々の人生を掬い上げて世界の一部であることを知らしめることではないでしょうか、言い換えるなら世界に響く声を持たない人の通訳です」  
 「聞く人は自分もそうであることを知りますね、その瞬間、言語や人種の壁が消えます」  
 「その通りです、言語は素晴らしいものだけど、排他的な側面もあります、風を通すことができるのは通訳と翻訳家でしょうね、作家はその原形を示すために苦しむ原始的な通訳かしら」（本書の164ページからの引用）。

著者である乙川氏は、作家として自分が日々行っている営みを、通訳と翻訳の作業を行っている同じ表現者としての専門職の気持ちを描写することで「表現」する仕事の本質に迫りたいという思いがあったと思われる。小説の筋立てとしてはドラマを盛り上げるためにやや無理な設定があるようにもみえるが、二人の主人公の内面の表現者としての成長を描くところに、むしろ力が入っている。

通訳と翻訳においては、対象が話し言葉か書き言葉かという表層的な違いを遥かに超えて、言葉との格闘を経て表現を突き詰めて極限にまで磨きをかける専門職としての厳しさが要求される。言葉を伝える職業につく者が、仕事の上での葛藤においてどう「表現する仕事」に向き合っているのか。本書はドラマチックな筋書きの小説というかたちをとりながら、実は通訳・翻訳の仕事とは、苦悩しながらピッタリの表現を生み出していく「表現者」の仕事であると端的に表している。そこがエピソードだけにとどまりがちエンタテインメント性の強い小説や映画とは大いに違う。ただし、乙川氏の限界でもあるが、自身の作家としての姿の投影をできる文章を書く作家に近い翻訳家の仕事の描写は生き生きと実態に近いと思われるが、「その場におけるコミュニケーション」を成立させる、その場でのコミュニケーションが「伝わるか？伝わらないか？」の二つに一つしかない、通訳者の仕事の厳しさについては、女性主人公の生活の描写部分を含めて、深みが足りない記述にとどまっているのが惜まれる。

この小説の一番の収穫は、「通訳・翻訳の仕事の本質は表現者である」ことを再確認したことである。今、通訳者、翻訳者の仕事をしている人はもちろんのこと、何より、これから通訳・翻訳の仕事を目指す人たちに読んでもらいたいと思う。

出所注：

<http://mainichi.jp/articles/20160124/ddm/015/070/025000c>

.....  
**【評者紹介】**

鶴田知佳子（TSURUTA Chikako） 会議通訳者、放送通訳者。東京外国語大学教授。  
 .....

